

『INCH の楽しい仲間たち』 vol.8 その1

※世界地図を用意して読むと、移動距離がわかるよ！！

スコットランドヘウイスキーを飲みに

佐伯 順弘（岐阜県）

先日の INCH まつりのときに、黒澤くんから、「スコットランド旅行で原稿書いてみませんか。」とありがたい言葉をいただいた。折角なので、書かせていただくことにした。スコットランドには 2012 年の 8 月と 12 月、2016 年の 8 月、2017 年の 8 月の 4 回訪れている。ウイスキー蒸留所訪問が主な目的であったのだが、その他にも心魅かれるものが多くあり、すっかりかぶれてしまった。今回は 2012 年、初めてのスコットランド訪問について書こうと思う。

冒険探検部時代に書いていた文章とそれほどかわらないぐだぐだとした旅の記録である。お気に入りの酒でも飲みながら、ゆるく読んでいただけたら、幸い。

2012 年は、台湾の高雄日本人学校に赴任していた。そして、2012 年と言えば、ロンドンオリンピックである。そして、ロンドンと言えば、イギリス、イギリスと言えば、スコットランド、スコットランドと言えば、スコッチウイスキーである。さらに、この日本人学校には夏の部活などない。会議などもない。そういう訳で、今までの部活漬けの身には信じられないほどの時間がある。私は、長年の野望であったスコッチウイスキー蒸留所を訪ねる時が来たのを悟っていた。これがその後のイギリスかぶれ及び、蒸留所巡りにハマるきっかけだったことをその時はまだ自覚せずにはいた。

航空券は知り合いの旅行社に頼んで、4 月 30 日に確保（高雄→香港→ロンドン）。ロンドンからはネットで航空券（ロンドン→グラスゴー、グラスゴー→アイラ）を取った。目指すはスコッチウイスキーの中でもひととき強い個性を放つアイラモルトの聖地、アイラ島である。

DAY1~2

さて、旅行当日。私の旅はかなり高い確率で様々なトラブルが起きるのだが、今回は最初から来た。8 月 2 日 11:25 高雄発香港行きのフライ

トが台風のためにキャンセルになったのである。いやあ、さすが台湾。台風直撃が普通のことであり、台風の影響で一般企業まで休みになるくらいなのだから、別に不思議ではない。何とか 20:30 高雄発、24:35 香港発に乗れることになった。格安航空券でも台風のために飛べないという理由なら、変更くらいしてくれるのだ。しかし、そこから先が問題である。さすがに 12 時間以上の遅れは想定していなかったもので、乗継の次のフライトには間に合わなくなった。別の航空会社なので、台風による遅れは当然関知してくれない。何とか、ネットで取り直しを試みる。1 つの航空券はできた。もう 1 つは空港の公衆電話から、時間も関係なくイギリスまで電話をかけ、ありっだけの英語力を駆使して、何とか確保した。まだ、出発もしていないのに、旅の日程をかなり消化した気分だった。いつものことなので、どうということはない。むしろ定番のイベントだとさえ感じる。もう少し英語力をつけたいと今頃思うのも毎度のことでは情けないのだが。

そうこうしているうちに、台風通過に伴い、その影響も収まったところで、やっと高雄を出発した。香港で深夜の乗継。そして、ロンドンヒースロー空港に到着したのは、朝 6:00 頃。

寒い！いくら早朝だといっても夏である。この寒さは驚きだ。フライトの乗継まで時間がある。機内で食べたと言っても、やはり現地で現地のを食べないと到着した気にならないので、カフェで少し休む。今日のうちに、二回のフライトをこなしてアイラ島に行くのだ。休めるときに休んでおくのは作戦行動の基本である。14:30 グラスゴー行き、16:40 アイラ島行を乗継いで、やっとの思いでアイラ国際空港に到着。実に 2 日目の 18:00 頃のことである。

さて、とりあえず空港施設の外に出て状況を見ることにした。そこにあったのはバス停と 1 台のタクシー。そして、もう一人の旅行者。「シェア

する？」とその旅行者は言ったと思う。「ありがとう、もちろんだ。」と答えたと思う。もう、一瞬の出来事で、タクシーは走り出していた。自分でも驚くくらいの瞬発力だ。一緒に乗った旅行者とは少し挨拶をしたくらいで、特に話も弾まなかったが美しい女性だった。彼女の方が遠くまでいくとのことで、持っている小銭すべて（1000円分くらい）を渡して車を降りた。

やっと宿泊する街、ポートエレンに着いた。

White hart hotel は入り江を望む静かなホテルである。本当に時々通る車のかすかな音の他は、カモメの鳴き声と波の音しかしない。部屋も落ち着いていて、気分がいい。夕食までまだ時間があるようだ。少し街を歩く。ここは入り江に沿ってできた小さな街である。冷えた風からは微かに潮の香りがする。売店、ホテル、レストラン、CO-OP、港、砂浜。そして、潮の香りに時折交じっているのは、まぎれもなくピートの匂い。ピートを実際焚いたことはないが、アイラモルトにつながるこの香りを間違えうわけはない。アイラ島にやってきたのだという実感がふつふつと湧いてくる。さて、腹も減ったところで夕飯でも食べるかとホテルに戻り、レストランに行ってみて驚いた。場違いなほど高級感あふれるところだったのだ。カメラを出すことも憚られるくらいだった。

ブルーチーズやクルミがはいったサラダ、チキンのベーコン巻にどっさりのフライドポテト。うまさと量に満足。エールビールのうまさにも驚いた。2PINT 飲む。（1PINT は 0.568L である。）アイラ島最初のウィスキーは蒸留所で飲もうと思っていたので、その日はおとなしく波の音を聞きながら寝る。

DAY3

朝食をとる部屋は昨夜のレストランとは別の部屋だった。しかし、ここも美しくテーブルがセットされ、なかなか気分の良いところだ。海も見える。さて、オーダーして運ばれてきたのは大型の皿だった。これが噂のイングリッシュブレックファーストか。いや、ここはスコットランドだから、スコティッシュブレックファーストというべきか。（後で調べたら、そのとおりだった。）夕食もそうだったが、朝食もうまい。誰だ、イギリスのメシがまずいなどといった輩は。ここではっき

りさせておきたい。イギリスのメシはうまい。これは真理である。

朝食後、やや食べ過ぎの腹を抱えながら、探索に出かける。目指すは LAPHROAIG である。アイラモルトにハマるきっかけとなったスコッチであり、コードを思わせる強い香りによって好き嫌いが大きく分かれるといわれるアイラモルトを代表するウィスキーの1つである。地図でどこにあるかはわかっていた。多めの雲とその間から射す強い光。海風が気持ち良い。やや肌寒いが、日が射せばかなり暖くなる。アザミなど豊富な草花が辺りに広がっている道をたらたら歩く。この街の交通についての理解が進んでいなかったため、徒歩で向かったが、ゆっくり歩いて約 40 分で到着してしまった。



初めての蒸留所。ビジターセンターに入るも、蒸留所見学ツアーは少し前に出発。更に、「説明してもらっても、どうせ理解できないし・・・。」という気後れから、外のベンチでのんびり過ごす。しばらく、休んだ後、LAGAVULIN へ向かう。やはり、徒歩である。実は宿泊している街、ポートエレンから東の方面の道沿いに3つの蒸留所がある。何とか歩いて行ける距離に並んでいるのだ。（数年後、その小道を Three Distilleries Path というのだと知る。）



LAGAVULIN には約 20 分で到着。都合の良い時間に見学ツアーがあったため、先ほどの気後れも忘れて参加。製造の過程などはほぼ理解していたため、説明もなんとか聞き取ることができて、満足。冬だったら更に気分がよいであろう暖炉のあるラウンジでテイasting。至福の時を過ごす。もう1つの蒸留所 ARDBEG は次に回すとして、帰途に就いたが、再び LAPHLOAIG を通過したとき、やはり、一番気に入っているアイラモルトなら行っておくべきであろうと考え直し、ツアーに参加する。ツアーは先ほどのツアー参加の経験から、より理解しやすかった。



(ラフロイグのポットスチル)

最後は、LAPHLOAIG の歴史が展示された博物館のようなラウンジの一角でテイasting。これまた、至福の時。少子に乗って、会員の入会申し込みをしてしまった。特に、会費が必要なわけではなく、それどころか敷地内に土地をもらうことになった。とはいっても、両足を揃えて立っただけのものではない。



(世界中の人々が土地を所有するエリア)

それでも所有は所有。そして、LAPHLOAIG に貸すという形で、貸し賃をもらうことになる。それが、グラス一杯のウィスキーとくるからたまらない。そりゃまた、訪れたくもなるというものだ。「自分の土地に旗を立てておいてね。」ということなので、用意されていた日の丸をその土地に立てた。諸外国に混ざって、日本の国旗が用意されていたことがうれしかった。

さて、LAPHLOAIG を後にして、大満足でホテルへの道を歩く。イギリスは一日の中に四季があるとされるほど天候が変わりやすく、当然気温も大きく変化する。途中、そこそこの雨に降られたものの、想定内であったため雨を楽しんで歩く。途中で、ショップに立ち寄り、水、牛乳、ポテチ、 Pasta サラダを買い、夕食として食べる。昨日の6分の1の出費で済む。どこまでの貧乏性である。

その日は疲れていたせいもあり、早い時刻に寝てしまった。

DAY4

誕生日を迎える。いつからか旅先で誕生日を迎えることが多くなった。数年は1人、山で誕生日を迎え、1つ成長して帰るといふようなことを思っていた時期もあった。

さて、今回の蒸留所訪問は2つということにして、この日は街の探索をすることにした。ハガキと切手を買った他はずっと歩き続けた。やはり歩くのが好きだ。立ち止まって石を拾ったり、地層から大地の変化を考察したり、人々の暮らしを見たりするのはとても楽しい。その日の昼食は街で一番高そうなホテルのレストランを選んだ。日曜日ということで、サンデーローストの日だった。この日は父親がローストビーフを作って、家族で食べる日なんだそうだ。ということで、エビのスープ、ローストビーフをオーダー。ローストビーフもおいしかったが、エビのスープがこれまた絶品であった。エビのワタを使っているのだと思われるが、素晴らしい味だった。再び、未だにイギリスのメシはまずいと思っている人々に認識を改めるよう訴えたいと痛切に思った。昼食に満足し、ホテルに戻るとしばらく惰眠をむざぼった。16時頃、ホテルのラウンジでビール。ほろ酔いで、散歩に出かける。ホテル前の海辺はいつ

も気持ちの良い風が吹いている。波の音とカモメの鳴き声だけが聞こえ、他の余分な音が入ってこない。最初にこの街に来たときに感じた微かなピートの香りも穏やかな風に交じってくる。

アイラの風を十分堪能した後、再び先ほどのラウンジに戻り、ハドックのフライ（フライドフィッシュ）、エールビール2PINT、そして、今回行けなかった ARDBEG 1 ショットを楽しむ。とにかく、うまい。くどいようだが、イギリスのメシは・・・。



(ほとんどのメニューにポテトがつく)



夕食後も少し街をうろついた。なかなか日は暮れない。どんよりとした空。冷えた風。人通りがほとんどない街。もちろん、いないわけではない。パブは酔っぱらいでいっぱいである。

さすがに、一日中歩き回って疲れていた。シャワーを浴びて早々に寝る。

DAY5

今日は朝の便でアイラ島を後にする。いつものスコティッシュブラックファーストをいただき、チェックアウトすると、バス停でバスを待った。本

当に来るのか？一度も試していないのに、絶対に遅れたくない空港への足にバスを選ぶとは、毎度のことながら、敢えてリスクを盛る旅行である。果たして、無事バスは到着し、一度も赤信号にひっかかることなく（信号自体がなかったような・・・）、バスはアイラ国際空港に到着した。滞りなく、チェックイン、セキュリティチェックを終え、グラスゴーへと飛び。



さよならアイラ島。また来るぜ。必ず、またくるからな。待ってなくても来るからな。と、一人、アイラの大地に誓うのであった。

それにしても、プロペラ機はなんか頑張ってる感じがいい。1+2列の座席、しかもリクライニングが効かないシート。これがまた楽しい。そんな楽しい時間もあっという間に過ぎ、40分ほどで、グラスゴーに到着。

とりあえず、6日間。実質3日ほどのアイラ島の旅は終わりを告げたのである。

その後、グラスゴーからロンドンへ飛び、鉄道でロンドン中心部へむかった。

ロンドンのセント・パンクラス駅ちかくにある Generator hostel にチェックイン。Generator はその後ロンドンでの定宿となっていくのだが、夜中～朝方にクラブ帰りであろう若者がへべれけで帰ってくるところが退廃的でいかにもステレオタイプなロンドンのイメージそのものである。

既に、旅の第2章に突入している。これから、今回の2週間の旅はもう一つのイベント、ロンドンオリンピック観戦へと続いていくのであるが、その話はまた別の機会にするかもしれないし、しないかもしれない。(つづく)